

## 論 文

### 流通手段の前貸と資本の前貸（上）

久 留 間 健

はしがき

- 一 社会的再生産の立場からみた資本の前貸と流通手段の前貸
  - I 『資本論』第二卷第三篇における流通手段の前貸
  - II 個別的資本の回転における貨幣資本の二つの側面
  - III 流通手段の前貸と区別される資本の前貸
  - IV 本章の結論……（以上本号所載）
- 二 『資本論』第三卷第五篇におけるマルクスの諸分析との関連
  - I マルクスのオーヴァーストーン批判
  - II マルクスのトゥーク、フラートン批判
- 三 スミスにおける資本の前貸と流通手段の前貸との区別

流通手段の前貸と資本の前貸（上）

## はしがき

マルクスは、『資本論』第三巻第五篇で、銀行が再生産にたずさわる資本家に対して与える前貸について、種々の視点からの分析をおこなっているのであるが、資本の前貸と流通手段の前貸との間の区別は、マルクスのこのような分析における一つの中心テーマであると考えられる。

マルクスは、この問題を従来の諸見解に含まれている概念上の諸混乱の批判という形で展開しているのであるが、この問題に関するマルクスの叙述は、第三巻第五篇が完成した草稿として仕上げられておらず——エンゲルスによつてはじめて現在の形でまとめられたところの——未整理のままの草稿にすぎなかったために、そして、論点が各所に散在しているために、<sup>(1)</sup> けつして理解しやすいものとはいわれない。

(1) 『資本論』第三巻第五篇でこの問題が、特に概念規定の問題として扱われている主要な箇所は、第二十六章「貨幣資本の蓄積、利子歩合に及ぼすその影響」——特にオーヴァーストーン批判の箇所、第二十八章「流通手段と資本。トーク及びフライントン」——全章、第三十三章「信用制度下の流通手段」——特に五七六—七頁、の三章である。

したがって、この問題についてのマルクスの見解を充分に理解するためには、各所に散在しているマルクスの叙述を、相互の関連において、それぞれに整理することが必要とされたのであるが、問題のこのような整理は、戦後になつて、三宅義夫教授の論文「いわゆる貨幣の前貸と資本の前貸の問題」(『立教経済学研究』第七巻第一—二号)に掲載、『貨幣信用論研究』(一九五六年発行に所載)においてはじめてなされたといつてよいであろう。

三宅教授が「いわゆる貨幣の前貸と資本の前貸」という表題の下でこれらの問題に与えられた整理は、簡単に、か

つ形式的にまとめるとつぎのようなことになる。

マルクスが、その信用に関する論述の諸所で扱っている貨幣の前貸と資本の前貸の問題は、単一の区別の問題として扱えられるべきではなく、種々の視点からの諸区別を含む問題として扱えられねばならない。

これらの諸区別は、つぎの三つの視点からの区別として整理されうる。

一 前貸をうける個々の産業資本家が、その前貸によって追加的価値を得るかどうか、という視点からの区別。  
二 前貸をうける個々の産業資本家が、前貸された貨幣を現実に資本として——剰余価値生産のために価値増殖過程に——投下するかどうか、という視点からの区別。

三 産業資本家に前貸するところの銀行にとって、その前貸がたんなる信用によって行なわれるか、あるいは銀行資本そのものの前貸を意味するか、の視点からの区別。

なお、教授は最後に社会的再生産の視点をあげておられる。それはマルクスが『資本論』第三卷第五篇第三十三章五七六—七頁で述べているところの視点である。

これについて三宅教授は、マルクスの当該箇所の文章を引用されたのち、次のように述べられている。

「右の文章は、銀行のなす前貸に流通手段の前貸と資本の前貸とがあり、ここで述べているような場合には『流通手段の前貸』だ、などということをしているものではない。そうではなくて、社会的再生産の見地から見ると、銀行が前貸するものはつねに流通手段であって、資本——現実資本——を前貸するのではない、ということをしているのである。と考えられる」（前掲書四五—二頁—傍点は原文のまま）。

したがって、教授によれば、この最後の視点は銀行による前貸における区別の問題ではないのであるから、貨幣の

前貸と資本の前貸との区別ははじめの三つのものにしぼられるわけである。

右のように、三宅教授は、マルクスが問題としている貨幣の前貸と資本の前貸との区別は単一の区別としてではなく、種々の視点からの区別として扱えられねばならぬと指摘され、マルクスが扱っているこれらの諸問題を、『資本論』第三巻第五篇、および『学説史』第三巻での関連箇所の詳細な分析にもとずいて、それぞれに区別されねばならぬ独自の問題として整理されているのであって、教授のこの論稿は、マルクス信用論、とくに『資本論』第三巻第五篇の理解のために大きな一歩をすすめられたものである。

そして、教授が指摘された銀行前貸におけるそれぞれの区別は、現実問題の分析に関してもまた、重要な意味を持っていると考えられる。

わたくしが、三宅教授による右のような業績のうえに、ふたたび同じ問題を取り上げるのは、教授の前掲論文自体のうちに、なお解決されるべき、しかもけっして重要でなくはない問題が残されていると考えるからにほかならない。わたくしが、教授による問題の整理の後に、なお未解決のものとして残されている、と考えるのはつぎのことである。

教授が「いわゆる貨幣の前貸と資本の前貸」という表題の下で整理されている区別においては、資本という概念が区別の主体をなしている。すなわち資本という規定が種々の視点から考察されるのにしたがって、この区別は、それぞれに独自の区別として規定される関係にある。三宅教授が、貨幣の前貸と資本の前貸との区別は、それぞれの視点によっていくつかの区別として考えられる、といわれる場合、このことは、資本という概念は種々の視点から規定される、という意味でのみいわれているのである。しかしこのかぎりでは、概念の対立は「資本」と、資本という規定

性を持たないという意味での「たんなる貨幣」とのあいだにあるのであって、「資本」と「流通手段」とのあいだにあるのではない。

ところが、『資本論』第三卷第五篇でこの問題が中心的に取り扱われている章、第二十八章が「流通手段と資本」という表題をもっていることからわかるように、マルクスにあっては「資本」と「流通手段」との区別がこれらの問題を取扱う際の一つの中心テーマであるように思われる。

さきにもたように、三宅教授は、マルクスが第三十三章五六頁において述べている文章を引用されたのち、マルクスは、ここでは、社会的再生産の立場からみれば銀行の前貸はすべて流通手段の前貸であって、資本——現実資本——の前貸ではない、ということをしているのだ、といわれている。

しかし、「流通手段」という貨幣の規定性は、それ自体、商品流通によってうけとるところの貨幣の独自の形態規定なのであり、たんなる個々の資本の立場をはなれた一つの客観的な規定にほかならないのであって、資本という規定が種々の立場から規定されるのにしたがって受動的に規定されるような関係にあるのではない。したがってまた、社会的再生産の立場からみれば銀行の前貸はすべて流通手段の前貸であるとするならば、流通手段の前貸は、銀行の前貸において、なんらの独自の規定を持たないことになる。したがってまた、マルクスが問題にしているところの資本の前貸と流通手段の前貸という区別は、概念規定としての対立としては、まったく意味を持たないことになるであろう。このように考えてみると、『資本論』第三卷第五篇でマルクスが問題としている——とわたくしは考えるのであるが——資本の前貸と流通手段の前貸との間の概念規定としての区別そのものについては、依然として問題は未解決のままに残されている、と考えざるをえないのである。

したがって、わたくしが本稿で取り扱わねばならないのは、第一に、『資本論』第三巻第五篇において、「資本の前貸」と「流通手段の前貸」との間に概念規定としての明確な区別が存在するかどうか、第二に、存在するとすればそれはいかなる区別を意味するのか、最後に、この区別は第三巻第五篇における、三宅教授によって整理されたところの銀行の前貸に関する種々の立場からの緒区別とどのような関連にあると考えられるのか、である。<sup>(2)</sup>

(2) 本稿では、三宅義夫教授のこの問題についての見解を『貨幣信用論研究』に所載されている論稿「いわゆる貨幣の前貸と資本の前貸」についてのみ考察した。

教授は、その後、『資本論辞典』(青木書店刊)の「貨幣の前貸と資本の前貸」という項目を執筆されているのであるが、両者の間には、とくにわたくしが本文中で問題とした『資本論』三十三章五七六―七頁の一節の解釈について、いくらか見解の变化があるように思われる。

『資本論辞典』のこの項目のなかでは、教授は次のように述べられている。

「最後の、第三十三章『信用制度下の流通手段』のところでは、再生産において機能している産業資本家が行うところの『流通手段』の前貸と『現実就業している彼の産業資本の前貸』とのあいだに区別があること、そして信用制度が発達して貨幣が諸銀行の手に積積するときには銀行がすくなくとも名目的にはこの流通手段を前貸することになるといふこと、が指摘されている。この記述をどう解釈すべきかという点、またこの指摘が以上の諸側面とどういう関連をもつことになるかという点、は、今日でもまだ事実上はつきり解明されるにいたっていない。」すなわち『資本論辞典』では、教授もまた、第三十三章で一節についての解釈は、未解決だといわれているのであり、そのかぎりではわたくしの結論と同一である。ただ、その間の見解の変化、すなわち、その後何故に三十三章の一節についての解釈はまだ未解決だと考えられるようになったのかについては『辞典』の性質上ならふれられていないために、本稿では、『貨幣信用論研究』での教授の見解をわたくし自身の問題提起の手がかりとして利用させて頂いた。

## 一 社会的再生産の立場からみた資本の前貸と流通手段の前貸

『資本論』第三卷第五篇第三十三章「信用制度下の流通手段」五七六—七頁の一節で、マルクスは流通手段の前貸について、これを社会的再生産の立場から考察している。この一節は、また、マルクスが流通手段の前貸について、これを従来の諸見解に含まれている概念上の諸混乱の批判としてではなく、自分の独自の問題として論じている部分でもある。したがって、流通手段の前貸が資本の前貸と区別される独自の規定として意味を持つと考えるかぎりでは、したがってまた、「資本の前貸」と「流通手段の前貸」との区別が一つの場合規定の区別として意味を持つていると考えるかぎりでは、この部分でのマルクスの叙述は、その理解のための鍵をなすものだと考えられる。

『資本論』の問題の箇所でのマルクスの文章は次のものである。

「流通手段の支出と資本の貸出との間の区別は、現実の再生産過程をみれば最もよくわかる。生産上の種々なる諸成分が如何にして交換されあうかは、すでに（第二部第三篇）吾々の見たところである。たとえば可変資本は、物的には、労働者たちの生活手段——彼等自身の生産物の一部分——なのである。だが、可変資本は、労働者にたいし、断片的に貨幣で支払われている。この貨幣を資本家は前払せねばならぬが、彼が前週に支払った旧貨幣をもって次週に新可変資本をふたたび支払いうるか否かは、信用業の組織に依存すること甚大である。社会的総資本の種々なる成分の間、たとえば消費手段と消費手段の生産手段との間の交換行為においても同様である。これらのものの流通のための貨幣は、すでに見たように、交換者たちの一方または双方によって前貸されねばならぬ。そこでこの貨幣は流通内にとどまるのであるが、交換の完了後には、つねに再び、それを前貸した者の手に復帰する。ただし、それは、彼

によって、現実に就業する彼の産業資本以上に前貸された貨幣だからである(第二部第二十章参照)。信用業が発展して貨幣が銀行の手に集積すれば、銀行こそは、すくなくとも名目的には、貨幣を前貸するものである。この前貸は、流通内にある貨幣にのみ関連する。それは流通手段の前貸であって、これによって流通させられる諸資本の前貸ではない」(『資本論』研究所版—以下同様—Ⅲ五七六—七頁—括弧内はエンゲルス注—なお邦訳は原則として長谷部訳による)。

すでに見たように、三宅教授は、マルクスの右の文章を引用されたものに、これについて次のようにいわれている。「右の文章は、銀行のなす前貸に流通手段の前貸と資本の前貸との二つの前貸とがあり、ここで述べているような場合には『流通手段の前貸』だ、などということをしているものではない、そうではなくて、社会的再生産の見地から見るならば、銀行が前貸するものはつねに、流通手段の前貸であって、資本——現実資本——を前貸するのではない、ということをしているのである」(『貨幣信用論研究』四五—二頁—傍点は原文のまま)。

この三宅教授の見解は、さしあたり内容の問題を別にしても、ここでのマルクスの解釈としては、いささか無理なように思われる。

もし、マルクスがここで銀行の前貸に流通手段の前貸と資本の前貸とがあることをいっているのではないとすれば、ここでマルクスが「流通手段の支出と資本の貸出との間の区別は、現実の再生産過程をみればもっともよくわかる」と述べている理由が、まったくわからなくなってしまふ。また、ここでマルクスが銀行の前貸を現物形態での資本の前貸と対比させているのだとするならば、銀行が貸出するものはつねに貨幣であり、現実資本ではないことは、それ自体あまりにも単純な事実なのであって、このことを明らかにするためにわざわざ第二巻第三篇を参照する必要はないと考えるをえない。



ともあれマルクスは、この文章の前半においては、流通に必要な貨幣の前貸という規定が、第三巻第五篇で銀行信用について考察される以前に、第二巻第三篇で社会的総資本の再生産と流通が考察される場合にすでに存在することを、また後半においては、信用業が充分發展すると、流通に必要な貨幣は、すくなくとも名目的には、銀行がそれを前貸するのだ、ということをとべているのである。

したがって、銀行による前貸が考察される以前に、すでに「流通手段の前貸」という概念があるとすれば、それは社会的再生産のどのような契機によって規定されているのかが、まずもって考察されなければならない。

マルクスがここで問題としているのは、『資本論』第二巻第三篇「社会的総資本の再生産と流通」とくにその二十章である。第二巻第三篇の当該箇所を考察することによって、マルクスがここで述べている「流通手段の前貸」という規定の内容もまた明らかとなるであろう。

### Ⅰ 『資本論』第二巻第三篇における流通手段の前貸

『資本論』第二巻第三篇においては、

一 個別資本の総体としての社会的総資本において、その再生産、すなわち社会的な質料填補および価値填補がいかに行なわれるか。

二 貨幣がその過程をどのように媒介するか。  
の二点が分析されている。

その第二十章は単純再生産を論じた部分である。

流通手段の前貸と資本の前貸(上)

単純再生産はつぎの表式によって示されている。

$$I \quad 4000C+1000V+1000m$$

$$II \quad 2000C+500V+500m$$

これを社会的質料変換——社会的総資本の諸成分の転態——の立場からみると、 $I(V+m)$ は $II C$ と交換され、 $I C$ 、 $II V$ 、および $II m$ は相互の間で交換されあうことになる。

これらの諸成分が相互に交換されることにより、社会的総資本は、その質料填補および価値填補を遂行する。すなわち、その場合には、社会的総資本はふたたびその生産を開始しうる状態にある。

貨幣がこの過程を媒介せねばならぬかぎりでは、交換当事者のうちのだれかが、まず貨幣所有者として、すなわち購売者としてあらわれねばならない。

貨幣がこの過程をどのように媒介するかについて、マルクスはたとえばつぎのように述べている。

「たとえば $II C$ と $I(V+m)$ との間の流通では、この流通のために $500$ ポンドの貨幣が $II$ から投下されると仮定した。大きな社会的生産者群のあいだの流通に分解される無数の流通過程では、時には甲群の一人、時には乙群の一人が、まず購買者として登場する——つまり貨幣を流通に投ずるであろう。このことは、個別的諸事情をまったく別としても、すでに相異なる商品資本の生産期間したがって回転の相異によって条件づけられている。だから、 $II$ は $500$ ポンドで同じ価値額の生産手段を $I$ から買うが、 $I$ は $II$ から消費手段を $500$ ポンドで買う。だから貨幣が $II$ に還流するが、 $II$ はこの還流によってはけっして儲からない。 $II$ はまず $500$ ポンドの貨幣を流通に投じて同じ価値額の商品を流通から引出したのであり、ついで、 $500$ ポンドで商品売って同じ価値額の貨幣を流通から引出す。

かくしてこの五〇〇ポンドが還流する。事実上、Ⅱはかくして五〇〇ポンドの貨幣と五〇〇ポンドの商品すなわち一〇〇〇ポンドを流通に投じたのであり、五〇〇ポンドの商品と五〇〇ポンドの貨幣とを流通から引出すのである。流通は、五〇〇ポンドの商品(Ⅰ)と五〇〇ポンドの商品(Ⅱ)との転態のためには五〇〇ポンドの貨幣しか要しない。だから、他人の商品の購買にさいして貨幣を投下した者は、自分の商品の販売にさいして貨幣を回収する。だから、もしⅠがまずⅡから五〇〇ポンドで商品を購入し、その後、Ⅱに五〇〇ポンドで商品を販売するならば、この五〇〇ポンドはⅡでなくⅠに復帰するであろう」(『資本論』Ⅱ四一七—八頁)。

社会的総資本の各成分間の交換が貨幣によって媒介されねばならぬかぎりでは、だれかがまず購買者として過程に登場せねばならないのであるが、マルクスが第三巻の問題の箇所で、「社会的総資本の種々なる諸成分の間の交換に必要な貨幣は、交換者たちの一方または双方によって前貸されねばならぬ、そこでこの貨幣は流通内にとどまるのであるが、交換の完了後には、つねにふたたびそれを前貸した者の手に復帰する」といっている場合の貨幣の前貸とは、ここでマルクスが説明しているところの、この交換における最初の購買者としての貨幣投下のことにほかならない。<sup>(3)</sup>

(3) このような貨幣投下について、マルクスは、たとえばつぎのようにもいっている。「一般的にいえば、産業資本家達が彼等自身の商品流通の媒介物として流通に投じる貨幣は……彼等が貨幣流通のために前貸しただけそれぞれの資本家の手に復帰する」(『資本論』Ⅱ四〇四—五頁)。

問題は、ここで考察されている最初の購買者としての貨幣の投下は、社会的総資本の再生産と流通におけるどのような契機をあらわすものとして、流通手段の前貸という規定を受取っているのかである。

流通手段の前貸と資本の前貸(上)

たんに貨幣をもって商品を購入するということそれ自体は、たんなる購買以上にはなんらの規定をもっていない。では、この場合に最初の購売者としてあらわれるということ、生産手段の購入のためか消費手段の購入のためか、あるいは労賃支払いのためかを問わず、貨幣を流通に投げ入れるということが、何故に流通手段の前貸といわれるのであろうか。

問題の簡単化のために、 $I(m+V)$ と $II C$ との交換のうち、さらに $I m$ と $II C$ の照応部分との交換を例にとつて、この問題を考察しよう。

この場合相互に交換されあうのは、 $I$ の商品 $500$ と $II$ の商品 $500$ である。

- I  $500$ の商品(生産手段)
- II  $500$ の商品(消費手段)

この交換に必要な貨幣は $500$ であり、それは $II$ が持っているとする。

- I  $500$ の商品(生産手段)
- II  $500$ の商品(消費手段)  $1500$ の貨幣

まず $II$ がその $500$ の貨幣で $I$ の生産手段を購入する。その場合には $I$ の商品は貨幣で実現されることになる。

- I  $500$ の貨幣
- II  $500$ の商品  $1500$ の生産手段

最後に、 $I$ がこの貨幣をもって、 $II$ の消費手段を購入するならば、この交換は完了する。すなわち、生産手段の形態にあった $I$ の $m$ 部分は、消費手段の形態に転化し、またそれに照応するところの消費手

段の形態にあったⅡのC部分は、生産手段の形態に転化するものであり、貨幣はそれを最初に投下したⅡの元に還流する。

### I 五〇〇の消費手段

### II 五〇〇の生産手段十五〇〇の貨幣

この場合には、流通に必要な貨幣はⅡが投下したのであり、それがⅡに還流するのは、Ⅱがこの過程の媒介に必要な貨幣をみずから投下したからにほかならない。この貨幣は交換が媒介された後にはⅡに還流する。この還流は、その投下自体の社会的な規定、すなわち交換の媒介に必要な貨幣の前貸という規定によって条件づけられているのである。

注意すべきは、この簡単な過程においてさえ、流通に貨幣を投じるのはⅡばかりではないということである。すなわちⅠもまた、その商品を実現したところの五〇〇の貨幣をふたたび流通に投じる。かくしてたんに商品購買者として貨幣を流通に投じること自体においては、両者の間にはなんらの区別もない。この場合両者はただつきのことによってのみ区別される。すなわち、前者(Ⅱ)は、いまや商品資本の形態にあるところの前貸された資本価値以上にその貨幣を投下したのであり、これに対して後者(Ⅰ)は、その貨幣を、商品形態にある剰余価値部分の実現によって獲得したのだ、ということである。

マルクスが、ここで交換に必要な貨幣の前貸と規定しているのは前者(Ⅱ)による貨幣の投下のみである。この場合Ⅱの貨幣投下が流通手段の前貸を意味するのは、この過程の媒介のために、一定額の貨幣が、すなわち社会的空費としての一定の価値額が必要とされ、この場合にはⅡがこれだけの価値額を、いまや商品形態にあるところの前貸さ

れた資本価値以上に、追加的に投下したものと想定されているからに他ならない。

だから、この場合にはⅡの貨幣投下は、生産手段の購買すなわち生産過程への資本の前貸という規定と、流通に必要な貨幣の前貸という規定を同時にもっているのであるが、これに対してⅠの貨幣投下は、たんなる所得の支出としての規定をもつにすぎない。

また、もしこの交換関係において、まずⅠが五〇〇の貨幣を投下するものとすれば、Ⅰがこの過程の媒介に必要な貨幣を前貸したのであり、これに対して、Ⅱが貨幣を流通に投じるのは、すでにその不変資本部分が貨幣形態で実現され、その本源的な出发点としての形態に、したがってまた、ふたたび資本として投下さるべき形態にもどっていたからにほかならない。この場合には、Ⅰの貨幣投下は、消費手段の購入すなわち所得の支出としての規定と、流通に必要な貨幣の前貸という規定を同時にもつのであり、これに対して、Ⅱの貨幣投下は、たんに資本投下としての規定をもつにすぎないであらう。

問題はむしろここから始まる。ここでは一つの貨幣投下が同時に二つの規定を、しかも本質的に区別される二つの規定をもつものとしてあらわれている。しかし、一つの貨幣投下が、同時に二つのまったく異なった規定をもつということは一つの矛盾にほかならない。

すでにみたように、ⅠmとⅡCとの交換において、たとえば、Ⅱが最初の購買者にしてあらわれ、この交換に必要な貨幣を前貸すると想定された場合、Ⅱの最初の貨幣投下は、それを生産手段の購買という側面からみるかぎりでは、それは生産過程への資本投下の表現である。これに反して、それを流通手段の前貸という側面からみるかぎりでは、それは、むしろ流通過程への資本投下の表現にほかならないであらう。

この場合、一定価値額が生産過程に投下された、と考えるかぎりでは、それはいまや生産手段の形態において生産過程で機能するのであり、次年度においてのみふたたび貨幣形態で還流する。これに対して、一定価値額がこの社会的交換の媒介のために必要とされたのであり、それをⅡが投下したのだ、と考えるかぎりでは、これだけの価値額は流通の媒介にのみ役立つのであり、第二巻第三篇における前提にしたがえば、流通の媒介を終えた後、年度内において還流する。前者における貨幣の投下とその還流は、資本の流通形式たる  $G-W-G$  を意味するのにたいして、後者における貨幣投下とその還流は、流通手段の前貸およびその還流を意味する。

これらの関係を充分明確に把握するために、ⅠmとⅡCとの転態とそれを媒介する貨幣の運動を図式化してみよう。

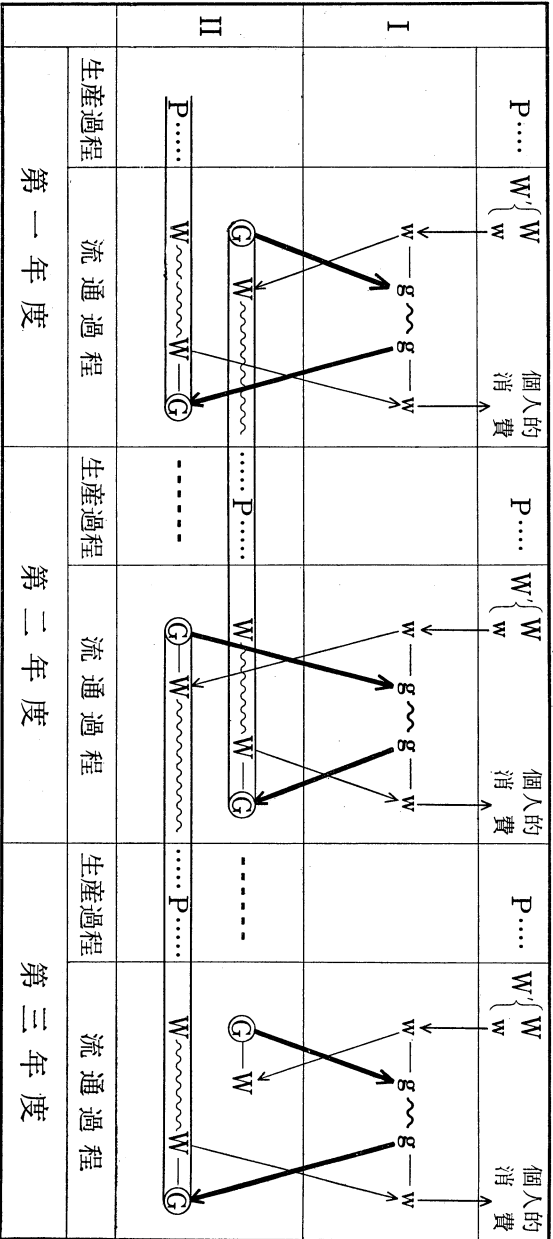
次頁の図によって、Ⅱの貨幣投下の、流通に必要な貨幣の前貸としての側面と、資本投下としての側面との区別を考察することにしよう。

この図においては、Ⅱの資本は二つの部分に分れている。すなわち、一部分はWの形態から出発し、他の一部分はGの形態から出発する。そして流通過程の開始の際にWの形態にあった部分は、過程の終了後には、Gの形態に、Gの形態にあった部分は、Wの形態に転形している。だから、それぞれの資本部分について考察するかぎりでは、それらは、第一年度においては、商品の姿態変換  $W-G-W$  のうちの  $W-G$  か  $G-W$  のいずれか一方をなしたにすぎず、二年間を通してはじめて完全な姿態変換を行なうように見える。

しかし、これらの関係は、実は次のことを意味しているにすぎない。

# I mとII Cとの転態とそれを媒介する貨幣の運動

14



- ~~~~~ は時間的経過をあらわさぬ。
- ..... は時間的経過をあらわす。
- ㊸—W..... P..... W—㊸は資本の運動、貨幣形態での資本の投下、およびその貨幣形態での還流をあらわす。
- 太線は貨幣の運動をあらわす。㊸➡㊸は流通手段の前貸およびその還流の運動をあらわす。
- ここでは流通が年末に一挙に行われるものと前提されている。これは一つの抽象であるが、重要なことはここでは流通が社会的再生産の一局面としてあらわされている、ということである。



II と I との間の転態は結局 I の W と II の W との交換  $\begin{matrix} I \\ W \end{matrix} \begin{matrix} W \\ \end{matrix}$  に帰着する。これがいまや貨幣によって媒介されるのであるがこの交換を媒介するかぎりでは貨幣は流通手段として機能するにすぎない。だがそれは交換者のどちらかにって前貸されねばならぬ——どちらかが、ここで前提されているような年度末の総流通過程において最初に購買者としてあらわれねばならない——のであって、ここでは II が最初の購買者としてあらわれるものと仮定されている。

しかし、売るよりも前に買うためには、彼は商品形態にある彼の資本以上に追加的な貨幣を持たねばならない。

この貨幣によって I m (生産手段) と II C (消費手段) との交換  $\begin{matrix} I \\ W \end{matrix} \begin{matrix} W \\ \end{matrix}$  が媒介されるのであるが、この場合には、それは次の形態をとって媒介されることになる。  $\begin{matrix} I \\ W \end{matrix} \begin{matrix} B \\ W \end{matrix}$   $\begin{matrix} II \\ W \end{matrix} \begin{matrix} B \\ W \end{matrix}$  の場合、II が買った商品は、これから自己の生産過程で機能すべき生産手段であり、売るのは自分の生産物である。

すなわち、この過程  $G \rightarrow W \cdot W \rightarrow G$  においては、実際は、II の不変資本部分の商品資本の形態から生産資本の形態への転形が行なわれたのであり、実は  $W \rightarrow G \rightarrow W$  が遂行されたにすぎない。この場合には、本来なら  $W \rightarrow G \cdot G \rightarrow W$  であるものが、順序を転倒して  $G \rightarrow W \cdot W \rightarrow G$  としてあらわれているのであって、II が最初に行なう  $G \rightarrow W$  の G は、たんなる形態規定としては、すなわち、II の資本がその循環中にとる貨幣形態としては、後にはじめて実現されるべき彼の商品の貨幣形態を先取したものにしかすぎない。すなわち、後にはじめて行なわれる  $W \rightarrow G$  の G をあらわすものにほかならない。この場合の  $G \rightarrow W$  は、結局は、彼の商品形態にある資本の生産資本の形態への転化の一過程にすぎないのであって、この場合産業資本としての資本の運動は、やはり W から出発するものと考えねばならない。

ただ、この場合、売って買うかわりに、買って売るためには、彼は売るべき商品のほかに、追加的に貨幣を投下せねばならなかったのである。この追加価値額は、彼の商品資本を生産資本の形態に転化するためにのみ機能するので

あって、彼が産業資本として前貸した資本価値以上に余分に前貸された価値である。この追加貨幣は——価値として——彼の商品の販売をまたないで、それを予定して購売するために、追加的に前貸されたものなのであるから、彼の商品の販売に際して還流する。このⅡへの貨幣の還流は、追加的に投下した貨幣の回収を意味するのみであって、けつしてⅡの資本がその循環においてとるところの貨幣形態への復帰を意味するものではない。

この場合、ⅡにおけるW—Gは、それ自体としては彼の商品の実現を意味している。しかし、実際には、この実現はずでに予定されて、最初のG—Wで先取りされてしまっているのであるから、このW—Gによって、彼の商品資本の生産資本への転化が完了するのである。したがって、このW—Gによっては、実は、彼がこの転化のために追加的に投下した貨幣が回収されるにすぎない。

以上の考察によって、Ⅱの最初の貨幣投下のもつ、資本投下としての側面と流通に必要な貨幣の前貸としての側面との区別はあきらかである。

この貨幣投下を、生産手段の購入、生産過程への資本投下、という側面から把えるかぎりでは、それは、むしろ後に行なわれる彼の商品の実現を先取りしたものにほかならない。またこれを、一定の追加価値額の前貸として把えるかぎりでは、それは流通手段の前貸を意味するのみであってけつして資本前貸——産業資本としての資本投下——を意味しない。

流通手段の前貸と、所得の支出あるいは資本前貸の表現としての流通への貨幣の投下とは、区別されるだけでなく、むしろまったく相反する関係にある。

すでにのべたように、一定量の貨幣、すなわち一定価値額が、流通空費として流通の媒介に必要とされ、それを資

本が供給せねばならぬかぎりでは、それだけの価値額は流通の媒介としてのみ役立つのであり、けっして資本として生産過程に投下されるわけにも、また所得として消費されてしまいうわけにもいかないのである。

なるほど、最初の購買において、貨幣は生産資本の諸要素に転態する——あるいは消費手段に転態する——とはいえ、この場合、生産資本に転態するのは、実は彼が商品資本としてもっていた資本なのである。しかし、それはまだ現実には実現していないのであって、この商品資本が実現されてはじめて、この転態が完了するのであり、その場合には、最初に投下した貨幣が回収される。最初に投下される貨幣は、追加価値額としては、こもこも貨幣形態と商品形態との形態をとるのであって、つねに流通過程に緊縛されている。

以上において、社会的総資本の再生産の一契機としての、流通に必要な貨幣の前貸という規定について簡単に考察したのであるが、これは結局、社会的流通空費の資本による負担の問題、すなわち、商品流通にさいして、社会的流通空費として必要とされる貨幣量を、だれが自己の負担において供給するか、という問題にほかならない。

社会的総資本の再生産と流通においては、その流通に必要な貨幣は、交換当事者のだれかによって——すでに前貸され、いまや商品形態にある産業資本以上に——追加的に前貸されねばならぬのであって、かかる貨幣は過程が媒介された後には還流する。流通必要貨幣の前貸は、たんなる資本前貸、あるいは所得支出の表現としての貨幣の投下とはまったく異なる。流通必要貨幣を前貸するかぎりでは、それだけの価値額は流通の媒介のためにのみ、追加的に投下されねばならぬのであるから、資本として価値増殖過程に投下することも出来ないし、また所得として消費されてしまふことも出来ないのである。

以上では、流通に必要な貨幣の前貸という社会的総資本の再生産における契機について、とくに I m と II C との交

換を例にとって考察したが、ここであきらかにされた関係は、同一部門内部での資本家相互間の交換関係においても、また資本家と労働者との間の交換関係においても、一般的に妥当する。<sup>(4)(5)</sup>

(4) 以上では、資本家相互間の交換関係について、とくにII CとI mとの交換を例として、流通手段の前貸という規定を考察した。資本家と労働者との間の交換関係においても事態は同じである。

II V内部での交換においては、資本家と労働者との交換関係が直接的にあらわれる。したがって簡単にこの関係について考察しておくことにしよう。

資本家階級IIはまず労働者に貨幣で労賃を支払う。労働者階級はその貨幣を所得として支出し、みずからを再生産すると同時に、消費手段の形態で存在するところの、みずから生産したV部分を実現する。かくして社会的再生産の一環として、労働者階級は階級として再生産され、また資本家IIの手許には貨幣形態で、すなわち可変資本としてあらたに投下されるべき形態で、資本が還流している。かくして階級関係が再生産される。

この場合には、資本家は可変資本としてみずから投下した貨幣によって、みずからの商品を貨幣化する。したがって、この場合には、彼の投下した貨幣は同時に彼の投下資本価値、すなわち現実に就業するところの彼の資本価値そのものをあらわすかに見える。

事態をよりくわしく見てみよう。マルクスは第三巻第五篇五七六頁の例の一節のなかでつぎのように述べていた。「流通手段の支出と資本の貸出との間の区別は、現実の再生産過程をみれば最もよくわかる。生産上の種々なる諸成分が如何にして交換されあうかは、すでに(第二部第三篇)吾々の見たところである。たとえ可変資本は、物的には、労働者たちの生活手段——彼等自身の生産物の一部分——なのである。だが、可変資本は、労働者にたいし、断片的に貨幣で支払われている。この貨幣を資本家は前払せねばならぬが……」。

ここでのべられているのは、可変資本は物的には生活手段にほかならない。したがって資本家が階級として現実に投下するのは、それだけの価値額の生活手段にほかならないということである。この場合IIはこの転態に必要な貨幣を、労賃の支払いなわち可変資本の投下として供給するのではあるが、それが同時に流通に必要な貨幣の前貸という社会的な規定をもつのは、けっしてこの貨幣支払いが可変資本の投下であるということによってではなく、それが——いまや商品形態で存在するところの

—— 現実に就業する彼の資本以上に、追加的に投下されねばならぬところの貨幣であることによってである。かかる観点からみれば、それは可変資本の投下ではなく、必要流通手段の前貸を意味するものにほかならない。

資本家と労働者との間の直接的な交換関係において、資本家によって前払される貨幣は、労働者自身が生産した生産物にたいする支払指図証券としての意味をもっているのであり、それが同時に一定額の価値の——したがってまた資本の——投下であるということは資本にとっては余計なことである。

(5) 以上では流通に必要な貨幣の前貸とその還流の問題について、とくに『資本論』第二卷第三篇について考察したが、すでに、こうした問題は『剰余価値学説史』(ディーツ版)第一卷第六章「ケネーによる『経済表』(岐論)」で扱われている。

また、流通に必要な貨幣は再生産にたざさわる資本家自身によって追加的に前貸されねばならぬ、という社会的再生産の契機は、単純再生産ばかりでなく、再生産一般に、したがって拡大再生産の場合にも貫ぬかれる。ただ、単純再生産の場合には、必要な貨幣額は、すでに過去に獲得されたものとして、すなわち一つの前提として考察されうるのに対して、拡大再生産の場合には——商品流通量の拡大に照応して流通貨幣量が節約されぬかぎりでは——追加的な貨幣があらたに供給されねばならない。信用を度外視するならば、それは従来蓄蔵貨幣として眠っていた貨幣からか、あるいは新産金によって補充されなければならない。新産金によって補充されねばならぬかぎりでは、社会的な流通に際して、その前提として、商品形態で存在する資本のうち、相応部分が新産金と交換されねばならぬである。

また、流通が、現実の貨幣のかわりに単なる信用によって媒介され、かくして流通手段が節約されるかぎりでは、流通手段の前貸の必要も、またそれだけなくなる。

この場合には、本来みずから流通手段を前貸せねばならなかった資本家は、後に行なわれる販売  $W—G$  をあてにし

て信用買いをする。

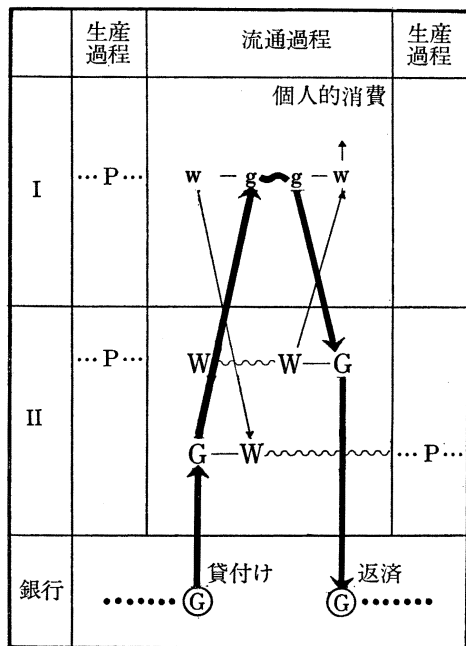
この場合にも、商品の販売  $W \rightarrow G$  に先立って購買  $G \rightarrow W$  が行なわれるのであるが、流通手段を前貸する際には、現金で購買が行なわれたのたいし、この場合には、貨幣なしに購買が行なわれるのである。したがってこの場合には、最初の購買  $G \rightarrow W$  における  $G$  は、後にはじめて実現されるところの、彼の商品の貨幣形態の先取り以外には何も意味しない。この場合には、彼は販売  $W \rightarrow G$  に先立って購買  $G \rightarrow W$  を行なうための追加貨幣の投下の必要からまぬかれるのであり、彼の商品の転態は、かゝる追加貨幣の投下なしに媒介されることになる。先には、この転態のために貨幣を投下したのであるから、この転態が第二の  $W \rightarrow G$  によって完了するときには、彼のもとに貨幣が回収される。この場合には、現実の貨幣なしに  $G \rightarrow W$  が行なわれたのであるから、第二の  $W \rightarrow G$  の後に貨幣が支払われることによって過程がはじめて完了する。信用が相殺される場合には、まったく貨幣があらわれることなく過程が完了する。たとえば、先の例で、IIの資本家が振出した手形が彼の商品の販売によって彼のもとに帰って来るとすれば、IIの資本家は、最初の購買では、いわば彼の商品に対する引換証と交換に Iの資本家の商品を先渡ししてもらったのと同じことになる。

また、銀行が産業資本家にかわって流通に必要な貨幣を供給するならば、再生産にたずさわる資本家自体は、流通手段前貸の必要からまぬがれる。この場合には、本来みずから流通に必要な貨幣を前貸せねばならなかった資本家が、彼の商品の販売  $W \rightarrow G$  に先立って購買  $G \rightarrow W$  を行なうための追加貨幣を銀行から前貸してもらおうのであり、銀行から借りうけた貨幣によって、彼の資本の転態が媒介されることになる。

たとえば、先に説明した  $I_m$  と  $II_C$  との交換において、銀行が流通手段を前貸するものと想定するならば、これら

### 銀行による流通手段の前貸とその還流

の関係は次の図においてあらわされる。



- ……は時間的経過をあらわす。
- ～は時間的経過をあらわさぬ。
- 太線は貨幣の運動をあらわす。
- $G \rightarrow G$ は流通手段の前貸およびその還流をあらわす。

この場合には、流通に必要な貨幣は、銀行によって前貸されるのであり、この貨幣は流通を媒介したのちには、銀行に復帰する。

IIは依然として最初に購買者としてあらわれる。しかし、この場合の購買 $G - W$ は、すでにみたように、後に行なわれる販売 $W - G$ を予定した $G - W$ にはかならぬのであり、したがってこの購買 $G - W$ の $G$ は、たんなる形態規定としては、IIの商品の貨幣形態の先取りにほかならない。この場合、銀行は、社会的再生産の立場からみれば、流通に必要な貨幣を前貸するのであり、IIにたいしては、IIの商品の貨幣形態を前貸するのである。

この場合には、産業資本家自身は、現実に再生産過程で資本として就業するだけの価値額を前貸しているにすぎない。

以上、社会的総資本の再生産と流通における流通手段の前貸という契機が、信用および信用制度によって媒介される場合について簡単に考察したのであるが、むしろ、社会的総資本の再生産と流通において流通手段の前貸という契機が存在していること自体が、流通を、現実の貨幣のかわりに信用によって媒介しようとする要求、さらには、流通手段の前貸を、一つの社会的機構たる銀行によって肩代りさせようとする要求を生み出すのだ、と考えられる。

かかる社会的再生産の契機を肩代りするかぎりにおいて、銀行が前貸するのは「流通手段の前貸」だと考えるべきであろう。

さて、当初の問題は、銀行の前貸における資本の前貸と流通手段の前貸との区別をあきらかにすることにあつた。したがって次に、銀行の前貸のうち、ここでいわれるところの流通手段の前貸と対立するところの資本の前貸という範疇があるのかどうか、あるとすれば、それはどのようなものであるのか、があきらかにされねばならない。

しかし、その前に、なおつぎのことを簡単に考察しておこう。

すでにみたように、流通手段の前貸は、社会的総資本の再生産と流通において、一定額の貨幣が流通の媒介に必要とされるかぎりでの、貨幣の追加的投下、したがってまた社会的流通空費としての流通手段の供給の問題にほかならなかつた。

『資本論』第一卷第三章では、社会的流通に必要な貨幣量を規定する法則そのものがあきらかにされている。しかし、形式としての商品流通を考察するかぎりでは、商品流通は、たんに商品の姿態変換の無限の系列としてのみあらわれ



るのであるから、ここでは、流通手段として社会的流通に必要な貨幣量が、だれによって、いかにして供給されるか、ということはまったく問題となりえなかつた。

また、資本の流通形式としての個別的資本の運動を考察するかぎりでは、商品流通は個別的資本の流通の前提であり、個別的資本の流通過程、すなわち、 $W-G$ および $G-W$ の過程は、商品流通の一部を形成するのであり、したがって、資本流通はつねに商品流通と交錯するとはいえ、全体としての商品流通そのものは、その運動の外部にあるものとしてあらわれる。したがって、社会的な商品流通によって必要とされる流通貨幣量の供給という規定は、たんなる個別的資本の立場からは問題とされえなかつた。

これにたいして、個別的資本の総体としての社会的総資本の再生産を考察する場合には、商品流通と資本流通が、相互の関連において全面的にあらわれる。この場合には、商品流通は、たんなる形式としてではなく、社会的総資本の再生産の一面面としての、より高次の規定性においてあらわれるのである。

すなわちこの場合には、商品流通は、たんなる商品の姿態変換の無限の一系列——それ自体としては、出発点も終結点もまたないところの無限の一系列——としてではなく、一定の拡がりと同時に、その始まりと終わりをもつものとして具体的に規定されている。

したがって、この場合には、商品流通に必要なだけの貨幣は、商品流通の始まりに際してその外部から供給されねばならぬものとして考察されなければならない。

この場合にはじめて、流通手段として社会的な流通に必要な貨幣量は、だれによって、いかにして供給されるのか、ということが、一つの独自の問題として考察されるのである。

とはいえ、このことは、社会的再生産を考察する以前、個別的資本の運動の考察においては流通手段の前貸という社会的規定がまったく問題とされえないということを意味するものではない。

社会的総資本の再生産の立場からするならば、流通に必要とされる貨幣は、流通当事者のだれかの負担において供給されねばならない。とはいえ、個別的資本の立場からしては、社会的空費として必要とされる貨幣を自己の負担において供給するという崇高な意識は存在しえない。しかし、やはりそれは、現実には、個別的諸資本によって供給されねばならない。

すなわち、流通に必要な貨幣量は交換当事者のだれかの負担において前貸されねばならないということが、社会的総資本の再生産の条件であるとすれば、このことは、個別的資本にとっては、外部から強制されるものとして、一つの外部的な強制法則によるみずからの再生産上の契機としてのみあらわれる。したがって、マルクスも、すでに第二巻第一篇および第二篇において、個別的資本の運動を考察する際に、諸所で、折にふれて社会的空費としての貨幣がいかにして供給されるかという問題に言及しているのである。<sup>6)</sup>

社会的総資本の再生産の立場からは、流通に必要な貨幣は交換当事者のだれかの負担によって追加的に前貸されねばならぬことがいわれるのみであって、それが、だれによって、いかなる形で現実に前貸されるかは、むしろ個別的資本の運動を考察することによってのみはじめて明らかとされる。

ただ、たんなる個別的資本の立場からは、その流通手段の供給という社会的規定は意識されないものであって、かかる規定そのものは社会的再生産の立場からはじめて、全面的に明らかとされるのである。

ここで、社会的再生産の問題以前に考察されているところの個別的資本の運動において、流通手段前貸という社会

的總資本の再生産上の契機がいかに貫徹されているかについて、なお簡単にふれておく必要がある。

(6) 『資本論』第二卷第一、二篇では、諸所において、この問題への言及がなされているが、とくに、流通時間、流通費、回転時間、剰余価値の流通等に関する諸章は、この問題との関連において重要である。

## Ⅱ 個別的資本の回転における貨幣資本の二つの側面

以上みたように、社会的總資本の再生産と流通の考察においては、その流通に必要な貨幣量は流通当事者のだけかの負担において、彼の前貸した産業資本以上に、追加的に供給されねばならぬことが明らかにされている。

第二卷第三篇の考察においては、流通が年末に一律に行なわれるものと前提されている。これは社会的總資本の再生産の問題を考察する際の必然的な抽象にほかならないが、現実の社会的再生産は、相異なる生産期間と回転期間をもった、諸個別的資本の絡み合いから成立っているのであって、商品流通はかかる諸資本の絡み合いに応じて継起的にある時点で始まりある時点で終る。そして、流通当事者のうちのだれがこの社会的流通に必要な貨幣を自己の負担において供給するかは、「相異なる商品資本の生産期間したがって回転の相異によって条件づけられている」(『資本論』Ⅱ四一七)のである。

したがって、諸個別的資本がいかなる形で、流通に必要な貨幣を前貸するか、という問題について充分に論じるためには、資本の循環および回転に関する諸章についての詳細な分析が必要となるであろう。

しかし、本稿ではこの問題については、必要なかぎりでごく簡単にふれるにとどめておくことにする。

マルクスは『資本論』第二卷第一篇「資本の姿態変換とその循環」および第二篇「資本の回転」で個別的資本の運動に

についての考察を行なっているのであるが、第二卷第三篇の冒頭にあたる第一八章「緒論」において、二卷におけるそれ以前の考察、すなわち個別的資本の循環および回転に関する考察についてのまとめを行なうと同時に、これから問題とされるべき社会的総資本の再生産と流通におけるあらたな視点について述べている。

その第二節「貨幣資本の役割」においては、それまでに、個別的資本の回転の考察によって明らかにされたところの貨幣資本の二つの面についての考察が行なわれている。

「(つぎのことは本篇の後の部分で初めて取り扱われるべきではあるが、とりあえず研究したい。というのは、社会的総資本の成分として考察された貨幣資本のことである。)

個別的資本の回転の考察に際しては、貨幣資本の二つの面が明かにされた。

(一)、貨幣資本は、各々の個別的資本が舞台にのぼる——資本としての過程を開始する——際にとる形態である。だからそれは、全過程をうごかす起動力として現象する。

(二)、回転期間の長さの相異およびその両成分——労働期間と流通期間——の比率の相異に応じて、投下資本価値のうちたえず貨幣形態で投下され更新されねばならぬ成分がそれによって運動させられる生産資本に対する比率、すなわち連続的生産の規模に対する比率が相異なる。だが、この比率の如何をとわず、いかなる事情のもとでも、過程的資本価値のうち絶えず生産資本として機能しうる部分は、投下資本価値のうちたえず生産資本と相並んで貨幣形態で実存せねばならぬ部分によって制限されている。ここで問題にするのは、正常な回転、抽象的平均だけである。この場合、流通停滞を調整するための追加的貨幣資本は度外視されている」(『資本論』II三五五—六頁)。

マルクスがここでいっている貨幣資本の二つの面のうち、第一の面は、前貸される資本価値の最初の本源的な形態



の機能場面すなわち生産の規模は、資本制的基礎上でさえも、その絶対的限界からみて機能的貨幣資本の大きさに依存するとは決していえない」(『資本論』II三五六頁―傍点は原文のまま)。

ここでマルクスが、第一の面の貨幣資本についてのべていることは、それは、投下資本価値の定在様式そのものであり、資本の本源的な形態にほかならない、ということである。したがって資本は絶えず貨幣資本の形態に戻らねばならぬのであり、また貨幣資本の形態から出発する。

この第一の面における貨幣資本の投下は、まさに資本前貸そのもの――すなわち価値増殖過程への資本投下の――表現である。

したがってまた、この貨幣資本は、すでに前貸され、いまや生産過程で機能しつゝある資本価値の大きさの表現でもある。

マルクスが、ここで「資本の機能場面すなわち、生産の規模は、資本制的基礎上でさえも、その絶対的限界からみて機能的貨幣資本の大きさに依存するとは決していえない」といっているのは、資本の生産は、その投下資本価値――したがってまた機能資本価値――の大きさによっては絶対的には制限されない、という意味である。マルクスは、ここで、再生産過程の弾力性のことについて述べているのである。

マルクスは、この第一の面における貨幣資本についての考察のおわりに次のように述べている。

「とはいえ、これら一切のことは、明らかに、貨幣資本にかんする本来的問題とは関係がない。それによって分かるのは、ただ、投下資本――ある与えられた価値額、これは、その自由な形態、価値形態・では特定の貨幣額から成りたつ――は、生産資本に転形された後には生産力能を含むのであって、この生産力能は投下資本の価値限度によつ

ては制限されないで、特定の活動範囲内では外延的または内向的に相異なる作用をなしうる、ということだけである」(『資本論』Ⅱ三五八頁)。

このような第一の面における貨幣資本の分析につづいて、マルクスは、第二の面の貨幣資本について、次のように述べている。

「第二の点について。社会的労働および生産手段のうち、磨損鑄貨を填補するために年々金の生産または購入に支出されねばならぬ部分が、そのかぎりにおいて社会的生産の大きさを削減することは自明である。だが、一部は通流手段・一部は蓄蔵貨幣として機能する貨幣価値について云えば、それがひとたび定在し獲得されておれば、それは労働や生産された生産手段や富の自然的源泉と相並んで定在する。それは、社会的生産を制限するものとは看なされえない。それが生産諸要素に転形され他国民と交換されることによって生産規模が拡大されるであらう。とはいえこれは、貨幣が従来どうり世界貨幣としての役割を演ずるということを内蔵する。

回転期間の長さに応じて、生産資本を運動させるに要する貨幣資本の分量が増減する。また、すでに見たように、労働時間と流通時間との回転時間の分割は、貨幣形態で潜在または停止する資本を増加させる」(『資本論』Ⅱ三五八—九頁—傍点は原文のまま)。

ここで、第二の面における貨幣資本についてマルクスが論じているのは、社会的流通空費としての貨幣の問題にほかならない。

すでにみたように、こゝで問題とされている貨幣資本の第二の面とは、一定の生産資本を絶えず機能させるために、すなわち、流通時間の間、生産過程を連続的にたもつために、追加的に投下されねばならぬ貨幣資本のことである。(?)

(7) このような追加的貨幣資本の投下の必要について、マルクスは第二巻第二篇、とくに、その第一五章「資本投下の大きさに及ぼす回転時間の影響」において、すでに詳細な分析を行なっているのであるが、そこでマルクスは、かゝる追加的貨幣資本の投下のもつ意味について、たとえば、つぎのように述べている。

「本源的生産資本と追加資本とへの資本のかかる配分により総じて達成されるのは、諸労働期間の継起が中断しないことであり、投下資本中のある同時な大きい部分が生産資本として絶えず機能することである」(『資本論』Ⅱ二六三頁)。

「一部分(投下資本中の—久留間)が生産資本として機能しうるのは、ただ、他の一部分が商品Ⅱまたは貨幣資本の形態で本来的生産から引上げられているという条件のもとでのみである。このことが看のがされることにより、総じて貨幣資本の意義および役割が看のがされる」(『資本論』Ⅱ二六四頁)。

一定の生産過程を連続的にたもつために、たえず一定額の貨幣資本が追加的に投下され、また更新されねばならぬ、ということとは、とりもなおさず彼が所有する全資本を生産過程に投下出来ないということをして、彼はそれだけの追加的貨幣資本を流通過程に投下することを余儀なくされているということの意味するにほかならない。

すなわち、マルクスがここで問題にしている、第二の面における貨幣資本は——第一の面における貨幣資本が、機能資本価値の表現としての貨幣資本であったのにたいして——つねに流通過程で機能せねばならぬ資本価値の表現としての、かくして流通過程へ投下されねばならぬ資本価値の表現としての貨幣資本にほかならない。

第一の面における貨幣資本の投下は、生産過程への資本投下をあらわすのにたいして、第二の面における貨幣資本の投下は流通過程への資本投下をあらわしているのである。

個別的資本の回転を考察する際にあらわれる、この追加貨幣資本の投下が、流通過程への資本投下を意味するものにほかならないことは、個々の資本のかわりに特殊な一資本、たとえば商業資本が流通時間を肩代わりする場合には



よくわかる。すなわち、商業資本が産業資本から独立するならば、個々の資本が二部分——つねに機能資本として生産過程に投下される部分と、つねに流通過程に投下され、かくして流通過程においてのみ機能する部分——に分かれるかわりに、社会的総資本の一部がつねに流通過程において機能することになる。

この場合、商業資本が貨幣資本として登場し、個々の産業資本にたいし、その流通時間を肩代りするかぎりでは、個々の産業資本にとっては流通時間はなくなったも同様であり、同時に個々の産業資本は、一定の生産過程を連続的に機能させるための追加的貨幣資本の投下の必要からもまぬかれる。

しかし、この場合には商業資本が、産業資本に代わってかかる貨幣資本を投下する。商業資本は、つねに、その資本を流通過程に投下するのであるから、この場合には、この追加的貨幣資本の投下の、流通過程への資本投下としての意味があきらかである。

商業資本は、個々の産業資本にたいして、一方ではそのW—Gを、他方ではそのG—Wを媒介する。かくしてつねに、資本のたんなる姿態変換を媒介するにすぎない。

したがって、商業資本が本源的に貨幣資本としてあらわれねばならぬかぎりでは、このことは、それだけの貨幣が、この姿態変換の媒介のために必要とされるということを、すなわち一定価値額がつねに流通手段として流通せねばならぬことをあらわすにほかならない。かくして、この場合には、商業資本が流通手段を前貸するものとしてあらわれるのである。

一方における社会的流通空費としての貨幣と、他方における個別的資本にとっての流通時間とは、この場合、次のような関連にあるものとして考えられる。

すなわち、流通手段として必要な貨幣は一つの社会的空費であり、かくして社会的生産にとって一つの負担にほかならないということが、個別的資本にとっては、流通時間は資本の運動にとって、一つのマイナスにほかならない、という形で、あらわれるのである。

この両者は、たとえば、それ自体価値物であるところの貨幣(金・銀)の代わりに、たんなる信用によって過程が媒介されることにより、同時に媒介される。この場合信用は、個々の資本にたいしては流通時間を短縮するのであり、社会的には貨幣を節約する。

この両者——社会的流通空費としての貨幣と個別的資本にとっての流通時間——の関連について、マルクスは、たとえば『経済学批判要綱』でつぎのように述べている。

「資本の必然的な傾向は、だから、流通時間なしの流通、ということであり、そしてこの傾向は、信用、および資本による信用の案出の基本的規定である。他方においては、信用は、そこにおいて資本が、みずからを個々の諸資本との区別において、あるいは、個々の資本が、みずからをその量的制限との区別における資本として、措定しようと求めるところの形態でもある。……流通時間は一面においては貨幣に対象化されている。(だから)貨幣をたんに形態契機として措定しようとする信用の試み(が生じる)。その結果、貨幣はそれ自体資本、すなわち価値であることなしに、形態転換を媒介するのである。これは流通時間なしの流通の一つの形態である」(『要綱』五五一—二頁―傍点は原文のまま)。

ここで、流通時間をゼロにしようとする資本の要求というのは、結局、生産過程の連続性を保つために必要な資本部分をゼロにしようとする要求にほかならない。流通時間そのものは、基本的には、個々の資本からまったく独立し

た外部的な、しかも自然的な諸条件によって規定されているのであって、かくして資本にとってまったく左右することの出来ない一つの客観的な条件にはかならないからである。

この場合、個々の資本にとっての流通時間が、同時に社会的空費としての貨幣と関連をもつのは、そのために、資本家は一定額の貨幣すなわち、一定価値額を追加的に投下することを余儀なくされる、ということによってのみである。

前節においては、流通に必要な貨幣は再生産にたずさわる資本家自身によって前貸されねばならぬという社会的再生産の契機が考察され、またかかる社会的再生産の契機は、すでに個別的資本の運動において、個別的資本の再生産上の契機として貫徹されていなくてはならぬことが考察された。かかる社会的再生産上の契機は、個別的資本の回転上の契機としては、生産過程の連続性を保つために、一定の追加的貨幣資本が——流通過程に——繰り返し投下され更新されねばならないという形であらわれている、と考えられる。個別的資本のかゝる追加資本の投下は、それを社会的再生産の立場からみるならば、同時に流通に必要な貨幣の前貸を意味するのだと考えられるのである。

### Ⅲ 流通手段の前貸と区別される資本の前貸

すでに前節でみたように『資本論』第二巻第三篇の最初の章「緒論」で、マルクスは、貨幣資本の二つの面についての考察を行なっているのであるが、その第一の面は、投下される全資本価値の本源的な形態としての、したがってまた全過程の起動力としてくりかえしてあらわれるところの、貨幣資本のことであった。

投下される全資本価値の本源的な形態としての貨幣資本は、同時にその定在様式にかならぬのであって、すでに投下されいままや生産過程で資本として機能するところの資本価値の大きさの表現でもある。

したがって、社会的総資本についていわれるかぎりでは、この貨幣資本の大きさは、機能資本としての社会的資本の規模を表現するにすぎない。

しかし、個々の資本の本源的な形態として考察されるかぎりでは、この貨幣資本の大きさは、私的所有にもとずくその量的限界をあらわすものにほかならない。

個々の資本の生産規模は、私的所有にもとずくところの個々の資本の量的限界によって規定されているのであり、この限界は資本の集中によって拡大される。

マルクスは、さきに考察した第二卷第三篇の「緒論」において、この問題についてつぎのように述べている。

「社会的労働そのものの組織化、したがって労働の社会的生産力の増加が、大規模生産したがって個々の資本家による貨幣資本の大量的投下を要求するかぎりでは、すでに第一部で明かにされたように、これは部分的には少数者の手における諸資本の集中によって生ずるのであって、機能的資本価値の大きさ——したがってまた機能的資本価値が投下されるための貨幣資本の大きさ——が絶対的に増加する必要はない。個別的諸資本の大きさは、その社会的総額が増大しなくても、少数者の手における集中によって増大しうる。個別的諸資本の配分が変化するだけである」

(『資本論』Ⅱ三五七—八頁)。

銀行による、資本の運動の本源的な形態としての貨幣資本の前貸に対する要求は、一面では、つねにその私的所有にもとずく量的限界を突破しようとする、したがってつねにより大きな資本を支配しようとする個々の資本の衝動にもとずくのであり、また他面においては、社会的な資本の配分——生産手段および消費手段にたいする支配の配分——の必然性にもとずくのである。

社会的総資本の再生産上の契機としての流通手段の前貸が銀行によって肩代りされるかぎりでは、銀行は、社会的空費として必要とされる貨幣の供給者としてあらわれるにすぎないが、この場合には銀行は、個々の資本に対する社会的な資本の所有者としてあらわれる。

流通手段の前貸の際には、前貸されるものは、すでに商品形態にある資本の貨幣形態、あるいは、流通時間によって必然とされるところの、追加的貨幣資本であった。

これに対して、この場合には、前貸されるものはあらたに投下される資本がえがく循環形態  $G \dots \dots G$  の出発点としての貨幣資本にほかならない。

「 $G \dots \dots G$  は資本の最初の循環でありうる。それは最後の循環でありうる。それは社会的総資本の形態として妥当しうる。それは、あらたに投下される資本——貨幣形態であらたに蓄積された資本としてであるか、一生産部門から他の生産部門に移るために全部が貨幣に転形された旧来の資本としてであるかをとわない——の形態である」(『資本論』Ⅱ五五—六)。

#### Ⅳ 結 論

『資本論』第三巻第五篇第三十三章での問題の箇所でのマルクスの記述は、「流通手段の支出と資本の貸出との區別は、現実の再生産過程をみれば最もよくわかる」という文章ではじまっており、その前半は、第二巻第二篇で問題とされている流通に必要な貨幣の前貸についての記述であった。第二巻第三篇で問題となる流通に必要な貨幣の前貸の意味についてはすでに考察した。つぎに問題とされねばならぬのは、後半のこれにつづくところのつぎの文章である。

「信用業が発展して貨幣が銀行の手に集積すれば、銀行こそは、少くとも名目的には、貨幣を前貸するものである。この前貸は、流通内にある貨幣にのみ関連する。それは流通手段の前貸であって、これによって流通させられる諸資本の前貸ではない」。

すでにみたように、三宅教授は、マルクスのこの文章を、銀行の前貸すべてに適應するものと解されており、ここでのマルクスの文章は「社会的な再生産の見地から見れば、銀行が前貸するものはつねに流通手段であって、資本——現実資本——を前貸するのではない、ということを行っているのである、と考えられる」と結論されている。

しかし、前半の文章でマルクスが問題としている社会的総資本の再生産における一契機としての流通手段の前貸は、本稿でこれ迄に考察したことによって明らかのように、生産過程への資本の前貸とはまったく区別される関係にある。すでにみたように、流通手段として流通せねばならぬ価値額を前貸するかぎりでは、これだけの価値額は流通の媒介のためにのみ必要とされるのであるから、同時にそれを機能資本として生産過程に前貸することは出来ない。そして、産業資本家の貨幣資本に対する要求には、みずから流通手段を前貸する必要からまぬかれるための貨幣需要のほかに、それとまったく異なるところの貨幣資本需要が、すなわち、私的所有によるその量的限界を突破しようとする衝動にもとづく貨幣資本需要があることも明らかにされた。

この場合には前貸されるものは、資本の運動の出発点としての、資本価値の定在そのものとしての、貨幣資本にはかならない。

したがって、この後半の文章は、前半で説明されている、流通に必要な貨幣の産業資本家自身による前貸を銀行が肩代りするかぎりでの、貨幣資本の前貸についての説明だと考えられるのであって、その場合に対立するのはけっして現

物形態での資本ではなく、資本の運動の出発点としての貨幣資本、すなわち資本そのものの定在様式としての貨幣資本にほかならない。

ここでマルクスが「流通手段の支出と資本の貸出との区別は、現実の再生産過程をみればもっともよくわかる」といっているのは、社会的総資本の再生産の考察においては、流通手段の前貸が、概念上純粋な形で問題とされるからにほかならない。

なお、ここでマルクスが、何故に流通手段の前貸のみを問題として、それと区別されるところの資本の前貸についてはふれていないのかが一つの問題となりうるかもしれない。

これは、銀行の、流通に必要な貨幣の供給者としての側面が、ここでの中心的なテーマとされているからだと考えられる。

ともあれ、資本という言葉は種々の立場から規定されうるのにたいし、流通手段という規定は、たんなる銀行業者の立場からも、また、たんなる個別的諸資本の立場からも独立した、一つの社会的、客観的な規定なのであるから、後者の規定を明確にすることにより、当然にまた前者との区別も明らかとなるのである。

ここで、マルクスの文章の後半の部分をあらためて解釈するならば、そこでマルクスの述べているのは次のことにほかならない。

(一) 信用制度が発達するときには、産業資本家自身に代って銀行が流通に必要な貨幣を供給する、かくして産業資本家は、みずからその資本の一部を流通過程に投下する必要からまぬかれる。

(二) この場合には、流通手段を前貸するのは、「すくなくとも名目的には」銀行である。この場合、「名目的」とい

う意味は、銀行は自分の資本をもって前貸を行なうのではなく、預金された他人の貨幣によってか、あるいは、たんなる信用のあらたな造出によって前貸を行なうものだからである。

(三) 産業資本家自身による流通手段の前貸の必要を肩代りするかぎりでの銀行の貨幣前貸は、流通手段の前貸であり、これによって流通させられる諸資本の前貸ではない。なぜならば、銀行が前貸するのは一定額の価値なのであり、流通手段として社会的に必要とされる価値額を前貸するかぎりでは、それだけの価値額は流通の媒介にのみ役立つのであって、前貸を受けた個々の資本のもとで資本として生産過程に投下されることは出来ないからである。

すでにみたように、第二卷第三篇においては、社会に現存する全資本価値は、商品と貨幣の形態にあるものとして考察されている。より正確にいえば、総投下資本は商品資本の形態で存在し、さらに流通に必要なだけの貨幣額がそれと並んで存在する。銀行が産業資本家自身による流通手段の前貸を肩代りするかぎりでは——社会的節約を度外視すれば——その前貸する総価値は、流通に必要な貨幣額にとどまる。しかし——かかる契機は第二卷第三篇では問題とならないとはいえ——銀行は、商品資本の形態で存在する資本価値そのものをも前貸ししうる。たとえば、このような事態は、産業資本家が機能資本家たることをやめ貨幣資本家に転化する場合、すなわち自己の資本が貨幣形態で還流した時に、それを銀行に預金し、銀行がそれをふたたび機能資本家に前貸するような場合を想定するならば、もつとも簡単に理解されうる。この場合には、銀行は「少くとも名目的には」流通に必要な貨幣ではなく、それによって流通させられる資本価値そのものを前貸することになる。この場合には、資本所有と資本機能の分離が生じる。

最後に、なお依然としてつぎの疑問が残るかもしれない。

銀行の前貸するものはつねに貨幣であり、その貨幣は購買手段としてか支払手段としてか流通に投せられる。そして



ひとたび流通に投ぜられるならば、それは流通手段として機能するのであるから——第二卷第三篇でのマルクスの規定とはことなるとはいえ——銀行はつねに流通手段を前貸することにならないか、という問題である。

しかし、この問題については次のことが想起されなければならない。すなわち、貨幣は $W-G-W$ の媒介としての形態規定性においてのみ流通手段なのであり、この規定をぬきにしては流通手段という規定はありえないということである。

第二卷第三篇でいわれるところの流通に必要な貨幣の前貸の場合には、要求されるものは、まさに $W-G-W$ の過程の媒介に必要とされる貨幣なのである。資本の運動は、そのたえざる再生産としての側面からみれば、つねに $W-G-W$ としてあらわれるのであって、この過程の媒介に必要な貨幣を前貸するかぎりにおいて、その貨幣前貸は流通手段の前貸を意味する。これに対して、銀行が、資本の本源的な形態としての、資本の運動の出発点としての貨幣を前貸する場合には、前貸されるものは、あらたに $G-W$ を行なうところの貨幣である。

この場合、両者とも貨幣だということにおいてはまったく区別はない。とはいえ前貸されるものは、同時に、貨幣形態での一定価値額である。流通手段の前貸に対する要求は、一定価値額が流通の媒介のために必要だということにもとづくのであり、資本の前貸に対する要求は、個々の資本のより大きな資本を支配しようとする要求にもとづくのである。

したがってまた、流通手段の前貸の場合には、前貸された価値額は流通の必要を満した後には返済される。これに反して、資本の前貸の場合には、前貸された価値額はいまや生産過程に緊縛されているのであるから、投下された資本がふたたび引き上げられるか、あるいは将来生産されるところの剰余価値の貨幣化のちにはじめて返済されう

る。

この両者の区別は次のことによつてきわめて重要である。

貨幣の運動は商品の運動の反映にしかすぎないという規定は、 $W-G-W$ の媒介としての貨幣の機能的定在においてのみわれる。これにたいして、資本の定在様式としての貨幣資本の場合には、貨幣はたんなる貨幣としてではなく、資本というより高次の生産関係の担い手としてあらわれるのであり、したがつてまた、その運動は資本の法則によつて規定されているのであつて、そのかぎりでは、商品流通から独立して、逆に商品流通を規定するものとしてあらわれるのである。

だから、銀行が流通に必要な貨幣の供給者として機能するかぎりでは、その前貸は、すでに一定規模の再生産と流通とを前提としている。すなわち一定規模の再生産と流通が前提され、その媒介に必要な通貨量が供給されるにすぎない。

これに反して、あらたに資本として投下されるところの貨幣資本の前貸の際には、その前貸に対する要求は、けつして一定規模の再生産と商品流通を前提し、その必要によつて規定されているのではない。この場合には、このあらたな資本の投下が逆にそれらを規定するものとしてあらわれる。この場合には、あらたな貨幣資本の投下は、それなくしては存在しなかつたところのあらたな商品需要を造り出すのであり、またあらたな商品の姿態変換系列を規定するのである。

銀行による、流通に必要な通貨の供給の増大は——通貨の量が商品価格を規定するのではなく、まさにその逆なのであるから——流通必要量の増大の反映にほかならず、けつしてあらたな商品価格の騰貴の原因ではありえない。

これにたいして、銀行による資本の前貸の場合には、銀行前貸の増大はあらたな物価騰貴の一契機となる。この場合、銀行前貸の増大が商品の価格騰貴の一契機をなすのは、それが通貨の供給増大を媒介するからではなく、あらたな貨幣資本の投下を媒介するからにほかならない。

ともあれ、この両者の区別の意味については、なお次章で扱うことにする。

(未完)